

# 基礎学力実態調査の分析ならびに国語力育成 をめざした初年次教育における授業実践計画

野々村 憲

筆者は本学入学者に対して、基礎学力実態調査（主に国語力）を実施した。本論考では、その実態調査①ならびに実態調査②の結果を分析し基礎学力実態を明らかにした。この調査結果の分析をもとにして、入学者の基礎学力育成のための教育として、大学の初年次教育を重視すべきであると論じ、この初年次教育における国語力育成をめざした授業実践計画を提示した。

## 1. 入学者の基礎学力実態調査

我が国大学進学率は、1955年僅か7.9%という状況であったが、その後進学率は上昇し、2009年には50.2%に達し、同年代の過半数が大学に進学するというユニバーサル段階を迎えている。大学・短期大学の収容力は2009年92.43%に達し<sup>1)</sup>、統計上、志願者のほとんどが大学に入学できるという大学全時代を迎えた。このような状況において、各大学は入学者確保のため、多様な入試制度を導入、拡大した。その入試種別においては、学力試験を経ないで入学を許可するという制度もあり、入試という入口での学生の質の保証という機能が低下しつつあるという状況が見られる。上記傾向は、本学にもあてはまり、多様な入試制度導入、拡大による入学者確保の結果、入学する学生の基礎学力レベルにおける学力格差が教育上の大きな課題となっている現状がある。

筆者は、本学入学者の基礎学力の現状を明らかにすべく、実態調査を行った。

### (1) 実態調査①

2010年、本学入学者の国語力実態を調査すべく、模擬試験を実施した。調査対象学生は、筆者のゼミ学生18名とした。

模擬試験は、公益財団法人日本漢字能力検

定協会主催日本漢字能力検定（以下、略称「漢検」と表記する）の試験問題3級を使用した。

漢検3級は中学校卒業程度（1608字）の漢字力を問うレベルであり、このレベルの国語力に対して、対象学生がどの程度のレベルにあるのかを調査した。

以下、調査結果のデータである（表1）。試験結果（200点満点）は高得点順に並べ、各学生が本学へ受験した際の入試種別も合わせてデータ化した。

表1を見ると、試験結果の得点において個人差の開きが大きいことがわかる。試験の合格ライン（140点）に到達しているのはNo.1～No.6の6名、対象学生全体の約3割である。模擬試験（200点満点）において、得点120点（60%）を目安とした場合、120点以上の学生が50%（No.1～No.9）、120点未満の学生も50%（No.10～No.18）である。結果を見てもわかるとおり、国語力の個人差の開きは明確である。

No.1の学生のように、すでに漢検2級に合格した上で本学に入学し、本学で実施した漢検で準1級に合格したというような国語力の高い学生がいる一方、No.16～No.18の学生のように、総合得点200点に対し、60点（30%）未満の学生もいるという実態である。模擬試験結果と入試種別を対応させると、



明らかな傾向が見られる。すなわち、得点 120 点 (60%) 以上の学生 (No.1~No.9) の入試種別は推薦入試、一般入試での入学者が大半であり、得点 120 点 (60%) 未満の学生 (No.10~No.18) の入試種別は AO 入試での入学者が大半であるということである。データから、学生の基礎学力と入試種別との間に高い相関関係があることがわかる。

表 1 漢検模擬試験結果

No	得点(200満点)	入試種別
1	188	一般
2	163	推薦
3	156	AO
4	154	一般
5	150	推薦
6	147	推薦
7	135	AO
8	125	推薦
9	120	推薦
10	110	AO
11	103	AO
12	86	AO
13	72	AO
14	69	AO
15	66	AO
16	58	AO
17	55	推薦
18	46	推薦

\* 漢検 3 級合格ライン : 140 点以上

## (2) 実態調査②

2011 年、入学者に対して学習成果到達度テスト (日本語テスト・数学 A テスト) を実施した。<sup>2)</sup>

調査対象学生は筆者のゼミ生 19 名である。学習成果到達度テストは、800 点満点とい

うスコアで採点され、その獲得スコアにより、学力レベルが判定される。

○日本語テスト結果 (受験者 18 名)

・ 出題分野

- [1]
  - ①漢字の読み
  - ②漢字の書き
  - ③熟語の完成
- [2]
  - ④語句の定義 1
  - ⑤語句の定義 2
  - ⑥対義語
  - ⑦類義語
- [3]
  - ⑧会話文の完成
  - ⑨語句の状況
  - ⑩語句の用例
  - ⑪短文の完成

以下は、スコアにより判定された学力レベル別データである (グラフ 1) (表 2)。

グラフ 1

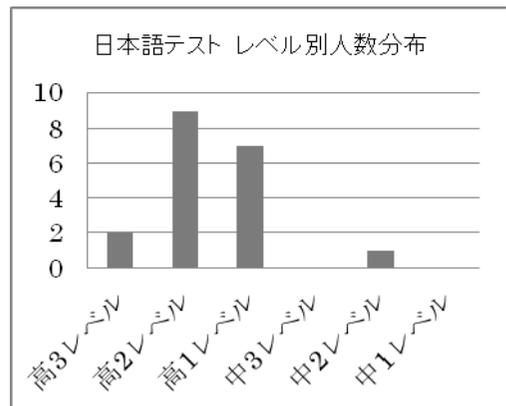




表2

レベル	人数
高3レベル	3
高2レベル	5
高1レベル	4
中3レベル	6
中2レベル	0
中1レベル	0

表3

レベル	人数
高3レベル	2
高2レベル	9
高1レベル	7
中3レベル	0
中2レベル	1
中1レベル	0

○数学Aテスト結果（19名）

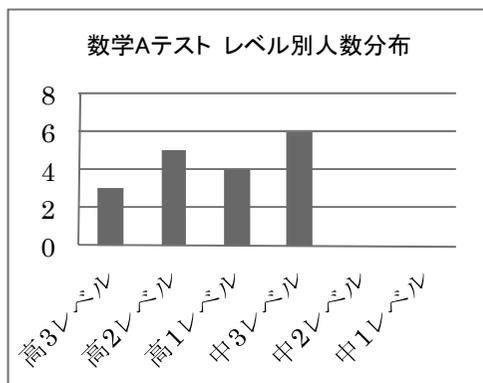
・出題範囲

- ① 数と式
- ② 方程式と不等式
- ③ 関数
- ④ 図形
- ⑤ 順列と組合せ・確率

以下、受験した18名のスコアにより判定された学力レベル別データである（グラフ2）（表3）。

日本語テスト結果と数学Aテスト結果のレベル別人数分布グラフを対比して見ると、基礎学力レベルで中学レベルと判定された学生が、国語テスト1名に対し、数学テストは6名もいることがわかる。

グラフ2



今回の学習成果到達度テスト結果を通して、ゼミ学生の基礎学力では、国語力以上に、数学、数理的能力の低さという実態が明確になった。

さらに、受験者全員の出題分野別得点結果を見ると、日本語テストでは、どの分野においても標準以上（解答率60%以上）レベルに達しているのに対し、数学テストでは、出題範囲①数と式 ②方程式と不等式、は標準レベルに達しているが、③関数 ④図形 ⑤順列と組合せ・確率、は標準レベルに達していない。

数学は系統的学習により学習理解を深める傾向が強い科目である。出題分野別得点結果を見ると、大学入学前の教育における数学の系統的学習がしっかりと定着していないのではないかと推測される。

以下は、日本語テストと数学Aテストの合計得点を、高得点順に並べたデータである（表4）。

表4において、日本語テスト、数学Aテストそれぞれ、スコアにおいて高2レベル以上の学生の得点結果に網掛け表示をした。

表4を見ればわかるとおり、数学Aテストにおいて高2レベル以上と判定された学生の大部分が、日本語テストにおいても高2レベル以上と判定されているという両者の相関関係が明確である。



表 4

No	総得点	日本語	数学 A
1	1285	587	698
2	1270	608	662
3	1260	537	723
4	1208	638	570
5	1164	610	554
6	1122	610	512
7	1087	690	397
8	1083	549	534
9	1050	576	474
10	1042	693	349
11	996	503	493
12	995	585	410
13	969	553	416
14	873	569	304
15	857	585	272
16	816	464	352
17	653	439	214
18	492	201	291
19	384	384	0 (未受験)

\*日本語：高2レベル以上（568～800）

\*数学A：高2レベル以上（481～800）

一方、日本語テストが高2レベル以上と判定された学生の約50%は、数学Aテストにおいて高2レベル以上に到達していないことがわかる。

この結果から考察すれば、ゼミ学生の国語力と数学、数理的能力を平行して高めるための必要条件は、国語力の育成以上に、数学、数理的能力の育成にあると考えられる。

## 2. 国語力育成をめざした授業実践計画

### (1) 初年次教育の重要性

入学者の基礎学力実態調査から、学力格差のある学生に対する教育指導のあり方が課題としてあげられる。中でも特に、学力の低い学生をいかに引き上げるかということは大学

における喫緊の課題であろう。

この課題に対して、各大学では入学前教育やリメディアル教育という制度を設けることで対応している状況である。このような制度をふくめ、最近では特に、入学後の初年次教育の重要性が主張されるようになり、各大学で、さまざまな初年次教育への取り組みがなされている。<sup>3)</sup>

大学初年次教育の重要性に鑑み、筆者も初年次教育を、基礎学力育成のための教育と位置づけ、授業実践計画を考案した。

### (2) 国語力育成をめざした授業実践計画

近年、本学入学者の学習実態から気づくことは、大学生としての自覚・モラルの低さ（大学コンプライアンスをめぐる各大学での事件等）、大学での学び方への知識のなさである。

さらには、大学生として学習成果を上げる上で基礎となる国語リテラシー力（読む、書く、話す、聞く）が未定着の学生が年々増加傾向にあるということも注目すべき現状であるにとらえている。

このような実態をふまえ、筆者は、初年次教育における教育目標を以下の2点に据えた。

- ① 大学生スタディ・スキル
- ② 国語リテラシー能力

大学生スタディ・スキルは、大学生としての自覚を持ち、大学生としてふさわしい学び方の技術の総称として用いた。国語リテラシー能力は、大学で求められる読解力、文章作成能力、会話力の総称として用いた。

大学入学後、まずは大学生としてもスタディ・スキルを定着させた上で、国語リテラシー能力を高めるという教育目標を立てた。

この初年次教育の目標は、筆者の担当する初年次科目『基礎ゼミナールⅠ』（前期）『基礎ゼミナールⅡ』（後期）で展開することとした。具体的には、『基礎ゼミナールⅠ』で大学生スタディ・スキルの習得、『基礎ゼミナールⅡ』で国語リテラシー能力の育成、とした。



以下は、平成 25 年度前期『基礎ゼミナールⅠ』の授業計画である（表 5）。

表 5

	授業内容
1	ガイダンス
2	自己紹介のしかた
3	大学とは・大学生とは
4	自分の通う大学について学ぼう
5	*学生プレゼンテーション
6	自分の学部・学科について学ぼう
7	大学の教員や職員スタッフを知ろう
8	大学生活のデザイン
9	*学生プレゼンテーション
10	卒業までの道のり
11	シラバスの理解と使用
12	講義の上手な受け方
13	*学生プレゼンテーション
14	演習に参加するコツ
15	定期試験の受け方

授業は教科書<sup>4)</sup>を使用し、筆者は現在、上記計画にしたがい、授業進行中である。

平成 25 年後期『基礎ゼミナールⅡ』の授業計画は以下のとおりである（表 6）。

後期は、基礎学力（特に国語力）の育成をめざし、文章読解・文章作成能力の授業を展開する予定である。

授業をふまえ、ゼミ生には平成 25 年秋より開始される予定の文章読解・作成能力検定〔文章検〕（公益財団法人日本漢字能力検定協会）を受検させたいと考えている。

『基礎ゼミナールⅠ』・『基礎ゼミナールⅡ』をふまえた初年次教育の結果ならびに考察を、今後本学紀要で詳細を論じる予定である。

表 6

	授業内容	
1	国語・数学ドリル	文章読解演習①
2	国語・数学ドリル	文章読解演習②
3	国語・数学ドリル	文章読解演習③
4	国語・数学ドリル	文章読解演習④
5	国語・数学ドリル	文章読解演習⑤
6	国語・数学ドリル	文章読解演習⑥
7	国語・数学ドリル	文章読解演習⑦
8	国語・数学ドリル	文章作成演習①
9	国語・数学ドリル	文章作成演習②
10	国語・数学ドリル	文章作成演習③
11	国語・数学ドリル	文章作成演習④
12	国語・数学ドリル	文章作成演習⑤
13	国語・数学ドリル	文章作成演習⑥
14	国語・数学ドリル	文章作成演習⑦
15	まとめ	

<注>

1) 旺文社教育情報センター（09.08）

2) 学習成果到達度システム（旺文社）

旺文社は、長年培ったテスト実績とノウハウを生かし、大学生・短大生の基礎学カスキルアップのためのテキスト（日本語・英語・数学・物理・科学・生物・コミュニケーション力・思考力）を作成した。このテキストによる学習後、学習成果（到達度）を確認するために考案されたのが、学習成果到達度テストである。実施したテストを当社に返送すると、テスト結果として、個人別学習到達度測定結果が返送されるので、そのデータをもとにして、各自、自分の基礎学力の現状を客観的に判断することができるし、チューターは個別指導ができるというメリットがある。

3) 河合塾からの初年次教育調査報告

『初年次教育でなぜ学生が成長するのか』

河合塾編著（東信堂）

4) 『スタディ・スキルズトレーニング』



『大学で学ぶための25のスキル』  
(実教出版株式会社)

<参考文献>

『初年次教育でなぜ学生が成長するのか』  
河合塾編著 (東信堂)